

# 大 教 センター 通 信

No.1

2011年9月号

大学教育エッセー

## 目指したいのは、 学生の理解を 深める教育

その1

加藤 かおり\*

### 「大教センター通信」の 発行によせて

大学教育機能開発センター長 森井 俊廣

高等教育を取り巻く環境は目覚ましく進展しています。現場で教育に携わる教職員の皆さまには、しながら、多くの場合日増しの多忙により、この進展を知り自身の教育実践に取り入れていくのがなかなか難しい状況になっているのではないのでしょうか。教育・学生支援機構 大学教育機能開発センター（以下大教センター）では、理論と実践の橋渡しとして、「大教センター通信」を発行し、広く教職員の皆さまへ高等教育にかかわる情報・知見をお伝えしていきたいと考えました。

「大教センター通信」は、形式的にはカジュアルでも、より理論的かつ実践的な知見にもとづいてこれからの大学教育を考えていくための紙面です。国内外の高等教育についての最新情報をふまえた話題提供をするエッセーや、ティーチングについての先生方からの疑問やご質問にお答えするFAQ、その他FD情報で構成していきます。

### 学習者中心の教育は、世界の潮流？

学習目標 (learning outcomes) 到達型の教育プログラムと授業デザイン<sup>注1</sup>、アクティブ・ラーニング<sup>注2</sup>を取り入れた授業方法、学習の過程と成果を形成的に評価するツールとしての学習ポートフォリオ<sup>注3</sup>。これらは、最近の全国の大学教育における教育改善、教育開発の取り組みであるファカルティ・ディベロプメント（以下FD）の3大トピックとなっている。そして、こうした取り組みが目指す教育のあり方として、くり返し使われている理念が、「学習者中心（学生中心）の教育」である。

学習者中心の教育という理念は、いまや世界の先進国における21世紀の大学教育の潮流であり<sup>注4</sup>、例えば日本が教育の質の保証や大学評価などについて多大な影響を受けているイギリスをはじめ、各国の大学教育開発 (Educational Development) がその開発の柱として掲げるスローガンでもある。

この学習者中心の教育という言葉は、私たちにどのような教育を連想させるだろうか？ 学生の興味関心を惹くような教育？ それとも、低下する学生の学力レベルに合わせた教育？ もし、あなたがそれ以上のことを連想できるとしたら、あなたはかなりの「FD通」である。おそらく、FD担当者であっても、何が学習者中心でなぜ学習者中心なのかということ、自分の言葉で説明できる人はそう多くはない。

なぜなら、この言葉もまた「FD」同様に欧米からの輸入であり、なぜ必要なのかの理由としてあげられる「大学（学生）の大衆化」や「知識基盤社会」という背景の概念もまた欧米からの輸入だからである。どうして輸入に頼ってしまうのか。それは、日本における大学教育という実践についての研究開発が著しく遅れているからであり、明治時代の和魂洋才をくり

新潟大学



返す事態になっているからである。

話がやや自虐的になってしまったが、これらの言葉が輸入とはいえ、そうした欧米の大学教育をとりまく背景や学生の学習の状況は、その後把握された日本の現状にも共通の背景であり状況である。したがって、日本が先進国として欧米に比肩する大学教育を発展させるためには、やはり欧米同様に、その教育のあり方を学習者中心の教育に転換していかねばならないことには変わりはない。課題は、そうした理念にどのように「和魂」を込めるか、どのように取り組むかである。

### 学習者中心の教育の前提とその焦点を知る

学習者中心の教育とはどのようなものなのだろうか。輸入するのなら、方法やツールのみならず、その本質をとことん知りたい。ここでは、イギリスの例をあげて、彼らの目指すところは何か、さらには、新任教員に教育研修を実質的に義務化<sup>注5</sup>してまでティーチングの何を変えようとしているのか、それを見てみよう。

まず、彼らは「学生が自分で考え、複雑な課題に対する自分自身の理解を深め、自分自身の成果を批判的に考える習慣を身につける」(Entwistle2009:1)、「学生がアイデアや問題を批判的に分析する」、「知的な思考のスキルを身につける」、「学生が原則や総合的な事柄を理解する」(Ramsden2003:22)ための大学教育を前提としている。この前提は、これまでの日本の大学教育においても伝統的に重視されてきた前提であり、この前提を否定する大学教員は殆どいないだろう。では、何がこれまでと違うのか。

1つは、従来こうした「自分で考える」ということを学生の自由に任せてきたといえは聞こえはよいが、ある意味で放任してきたやり方が通用しなくなっている、ということである。「自分で考える」ということや「自分で学ぶ」ということの意味やそのやり方自体を学ばせる必要が出てきたということである。これがいわゆる「大学の大量化」<sup>注6</sup>である。

そして、もう1つは、イギリスが目指すエクセレントな大学教育、すなわち学生の学習の質を高める質の高い教育(Teaching for quality learning)を効果的に行うためには、学生がどのように理解するのか、学ぶのかという理論やモデルにもとづく教育を行うことが合理的であり、教える側の論理(教員が何を教えるか)よりも学ぶ側の論理(学生が何をどう学んでいるか)を重視してティーチングを捉えなおす必要が出てきたということである。

つまり、学習者中心の教育とは、学習者が自らの学習の中心(主体)となるように彼らの学習への姿勢や学習方法を転換する教育であると同時に、学ぶ側の目線や状況に立つことでさらに学習の質を高めるティーチングを再構成するということである。

### 学生の学習へのアプローチを理解する

学習者である学生が自分の学習の主体となって自律的に学習できるようになるためには、彼らが自分自身の学習状況や立ち位置を理解する必要がある。

次の表は、私が参加したイギリスの新任教員向け教育プログラムでの参考書(Biggs and Tang 2007)から抜粋して作成したものである。その参考書は、学生の学習についての研究の成果にもとづいて、学生の学習へのアプローチ(取り組みの姿勢や状況)の傾向を、浅い学習しかしようとしない傾向と、学習を深めて行おうとする傾向の2つの傾向で示している。

学生の学習へのアプローチ	
浅いアプローチの傾向	深いアプローチの傾向
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 単位取得もしくは試験にパスすることのみを見ている。</li> <li>● 学習に不十分な準備時間しかとらない。</li> <li>● 事実の記憶で十分と誤解している。</li> <li>● 教育に対してシニカルな見方をする。</li> <li>● (学習への)強い不安をもっている。</li> <li>● 深いレベルで理解する能力が欠如している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 意味を持って、適切に取り組もうとする。</li> <li>● 適切な予備知識がある。</li> <li>● 高い概念レベルに焦点をあて、第一の原理から学び、順に構造化された知識基礎を求めようとする。</li> <li>● 関連性のない詳細な事柄よりも理論的に学ぶことを好み、それを学ぶ能力がある。</li> </ul>

翻って、自分の授業を受講している学生を思い出してみると、思いあたることばかりである。そこである時、授業中にこのアプローチのことを学生に話してみた。そして、その日の振り返り(自分の学びについてのミニレポート)に、ある1年次の学生の次のような記述があった。



「大学教育への浅いアプローチと深いアプローチ」を読んで、授業にどのように取り組んでいるかを振り返ることができた。第一志望の大学に行けず、第一志望とは全く違う学部に入ってしまったので特に専門科目において自分は浅いアプローチしかできていないなあと考えた。入学してからずっと学ぶのが苦痛になっていることが引かかっていたので「自分がどうアプローチしていくか」を考えて興味を持つようにしなければならなかった。

私は胸が痛くなった。浅いアプローチの学生たちが私の目の前に座っているのは、彼らのせいではない。彼らに入学の許可を与え、その席に座ることを許した私たちの責任である。そして、授業を受講している8割がたの学生が、この浅いアプローチと深いアプローチの狭間でどうしてよいか分からずにもがいていることに気づいた。

学生は変わりたくないと思っているわけではない。変わるための「きっかけ」や「助け」を必要としているのである。実際、学生に深いアプローチを試みることを勇気づけ、理解を深めるアプローチのティーチングを行っていくと、学生は驚くほど変わる。他のたとえ一方的な講義であっても、それを自分の学びに生かそうと思いはじめ。そしてついには、「参加しているわたしたちもどうしたらいい雰囲気のできるかを考えながらやるともっと質の高い授業になりそうです。」(学生の振り返りより)というように、自分たちの参加姿勢が授業を変えることに気づくまでになるのである。

そうした変わるきっかけの中心となるのが、「振り返り(reflection, 省察的な考察)」という言葉で注目されている、自分で自分の学習や理解を考えるとという行為である。「本当の学習は、学習者が振り返る時に始まる。」とは、イギリスでの研修プログラムで何度も見聞きしたもう1つの教訓である。授業では、まず、教員が説明した事柄について学生が反芻しながら、それがどういうことであり自分が何を理解または理解していないかを考えるように促していく。すると、やがて彼らは、反省という名の後ろばかりを振り返ることを超えて、自分を広げよう深めようと勝手に前へ走り出していく。

(次回は、その2. 学生の理解の深さを考える他です。)

## 注

- 1) 学習目標(learning outcomes)到達型の教育とは、本学でも取り入れている教育設計と実践のあり方。プログラム担当の教員集団(科目であれば担当教員)は到達が期待される「目安」としてのアウトカムズを提示し、学生が自ら到達する、あるいはそれを超える学習を行うことを支援する。
- 2) アクティブ・ラーニングとは、一言でいえば、学生参加型の学生の主体的な学習活動を促進するための教育方法である。ちょっとしたグループワークから、医歯学系では以前から取り組まれているPBL(Problem Based Learning)まで、多様な方法がある。「ハーバード白熱教室」で有名なサンデル先生の大人数講義でのディスカッション形式も、少人数グループワークと組み合わせられて構成されたアクティブ・ラーニングであるといえる。最近では、東大の駒場キャンパスにできたアクティブラーニングスタジオ(ICT支援型協調学習教室)も、関連する話題の1つである。マサチューセッツ工科大学の物理学教室が2001年にICTを利用したアクティブ・ラーニングを導入して以来、大きな教育成果をあげているなどの先行事例を参照したのだから。
- 3) 学習ポートフォリオとは、一般に学生が自分自身の学習の全体を振り返ることや、試験の結果だけでは測れない学習の成果をまとめて自らアピールするための道具として使われる。
- 4) 『グローバルな高等教育の潮流—大学教育改革を追跡する』(UNESCO, 2009)においてアルトバック(Altback)らは、現代の高等教育の特徴を「学習者中心の教育」とりわけ「学習アウトカムスペースの教育」として、アウトカムズとしての「質の高い学習(Quality Learning)」のためのティーチングが重要になっていることを提示した。
- 5) 2006年より、イギリスの80%以上の大学が修了証明取得課程(修士課程の3分の1程度)でのティーチングの研修を新任教員の正規採用条件にしている。
- 6) トロウ(Trow)は、大学進学率が15%までの段階をエリート段階、15%以上になるとマス段階、50%以上になるとユニバーサル段階に移行するとし、この移行が大学教育のあり方に大きな変革をもたらすとした。日本は、2009年に50.2%となり、ユニバーサル段階に入った。

## 参考文献

- Biggs, J., and Tang, C., 2007, *Teaching for Quality Learning at University*, 3rd edition, Open University Press, McGraw-Hill.
- Entwistle, N., 2009, *Teaching for Understanding at University-Deep Approaches and Distinctive ways of Thinking*, PALGRAVE MACMILLAN, Hampshire.
- Ramsden, P., 2003, *Learning to Teach in Higher Education*, Second Ed., RoutledgeFalmer, Oxtou.

\*教育・学生支援機構 大学教育機能開発センター・准教授

# I n f o r m a t i o n

## FDのお知らせ

### 1 新任教員のためのFD

- ①オリエンテーション(6月に実施済み)
- ②学習教育ワークショップI:  
1回目9月21日、2回目9月27日(2つの回は同じ内容です)  
本学の教育理念や最近の高等教育事情や枠組みについての最新情報を提供しつつ、現代的な教育デザインの意味や方法について、参加者と一緒に考えていきます。
- ③学習教育ワークショップII:  
1回目11月10日、2回目11月25日(2つの回は同じ内容です)  
マイクロティーチングによる授業実践のふりかえり、90分のレッスンプラン作成など、具体的な授業実践および改善の方法について、より実践的に考えていきます。

\*新任の方には部局長を通してご連絡していますが、その他ご関心のある方のご参加も可能です。お問い合わせは、下記連絡先まで。



(写真は、平成22年度学習教育ワークショップで)

### 2 ミニFD

大教センターでは、各学部学科のご要望にあわせて1、2時間程度のセミナーやワークショップなどのミニFDも行っています。お気軽にご相談ください。

トピックの例)

- 学生の理解を深める教育デザイン、シラバスの書き方
  - アクティブ・ラーニングを取り入れた授業デザインと実践
  - 効果的なフィードバックの方法
- その他 個人的な授業づくりのご相談にも応じています。

# 新潟大学

本通信のエッセー部分の原稿を募集しています。

エッセー部分は、現在大教センター教員が執筆していますが、大学教育の開発にかかわるエッセーを広く募集いたします。ぜひご一報ください。

お問い合わせ

教育・学生支援機構 大学教育機能開発センター 担当:加藤 kaori@ge.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性<sup>®</sup>  
この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。